

献腎を理解し、腎臓の大切さを知ろう

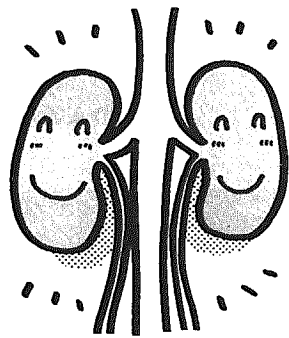
腎臓の働きをご存じですか。主に血液中の水分や塩分、タンパク質が分解してできる尿素などの老廃物を尿として排出する働きをしています。しかし、腎臓の機能が低下すると、尿が十分に排出できなくなり、老廃物が体内に残ってしまいます。このような症状を放置しておくと「腎不全」となり、尿毒症という生命を脅かす病気を併発する恐れがあります。腎不全の患者は、体内に残った老廃物を取り除くため、人工腎臓を利用した透析療法を受けなければなりません。

愛と健康の贈りもの 腎バンクへの登録にご協力を

もし、あなたが腎不全患者への移植のため、死後の腎臓を提供してもよいとお考えになったときは、腎バンクに登録し、あなたからの愛と健康の贈りものとして献腎にご協力ください。わたしたちにできることは、腎臓の病気の予防に心がけるとともに、多くの制約を強いられる人を救うために、献腎を理解し、協力を惜しまないことではないでしょうか。

腎バンク登録の問い合わせ先

社団法人 腎臓移植普及会
〇三―三五〇二―二〇七一



現在、透析医療を受けている人は、全国で約十三万人――この数は毎年約八千人ずつ増加する傾向にあります。こうした人は、週に二〜三回、一回当たり四〜五時間の透析療法を一生涯続けなければなりません。また、水分や塩分のとり方にも、かなりの制限が課せられてしまいます。つまり、一度腎臓の機能を失ってしまえば、厳しい制約の中で日常生活を送っていくためにはならないのです。病気になるのではなかろうか。残念ながら、人工透析療法は根治療法ではありません。しかし、一つだけ根治療法があります。腎臓移植です。

腎臓移植には、死体腎移植と生体腎移植があります。死体腎移植は、健康な腎臓をもっている方が急病や事故で亡くなったときに、遺族の同意を得たうえで、その二個の腎臓の提供を受け、二人の腎不全患者に移植するものです。また、生体腎移植は、死亡された方からの腎臓の提供を受けられない場合に、やむを得ず患者の親や兄弟など、肉親の一人から生存中に片方の腎臓をもらって移植を行うものです。

黒埼町の今昔

執筆 宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史 (三)

大野の人々に防火用水や集中豪雨の際のダムの役を果たしてくれた諏訪池も昭和三十八年に埋立られた

(先月号に続いて) 諏訪池の池畔(東側)は昭和の初期ごろいまるのようなものもなく、ガツボが池と田んぼの境界となっていた。新聞によるとこの池畔に堤をつくり桜の木を植える計画があり、この植林が実現すれば鷺ノ木の桜林とともに県下まれな景勝地となるだろう、というのである。しかし、残念ながら堤は築かれず、桜の植樹も実現しなかった。また、腐朽した玉橋をコンクリートに改築する計画のようであったが、これはまた木橋が架けられた。諏訪池の由来と埋められるまで

ころは、新町の桶屋商店(現在エル美容院)のすぐ脇まで池だった。現在諏訪町のメインストリート(現町道で前の国道八号線)は昔は池の西側の堤道で、昭和になってからその道際の池の傍らに数軒の家が建ち始めた。この池は、古老や大野諏訪神社の宮司小泉家の古文書によると、明治元年(一八六八年)神社裏の小沼堤防が破堤した際にできたもので、池の正体は名は判らないが諏訪神社の境内に面してあった事から通称「諏

訪池」と呼ばれた。大正期から昭和五、六年ころの池の水はまだ非常に綺麗で、水泳大会やボート競争などがよく行われたようである。筆者が子供のころ神社の玉橋の少し上手に木に造った町内の人たちの洗い場があった。洗い場は中六尺位、長さ二間位で、池の水の増減に合うよう二段位になっていて、神社付近の家々から大勢の女子が洗濯や煮炊きする食糧のすすぎ洗いに集まり、何時間も井戸端会議の賑わいがあった。(明

昔(明治の初めから)諏訪神社前にひょうたんのような形をした一町歩(一ヘクタール)余もある大きな池があった。昭和十年ころ池の北端は諏訪町の鳥原屋粉屋の裏あたりだったが、明治期にはそれより下の二ノ丁小松綿屋の裏あたりまでだったという。同じ昭和十年ころ池の南端は新町花清商店の脇までで、明治期の



大野諏訪池で舟遊びをする人々。中央に見えるのが諏訪神社と社。

治期には二ノ丁の小松綿屋の裏あたりにも洗い場があったという)池の水を綺麗にするため中ノ口川と流通させたら、という話が筆者の子供のころあったようだが、実現しないまま昭和十年ころから次第に池の水が汚れ始めてきた。しかし、十二、三年ころ、また子供たちは玉橋の上から池に飛び込んで泳いだり、魚釣りをしたり池は子供たちにとって絶対の遊び場だった。八月になると、町の向い側一面に蓮(こぼすとも言った)の花が咲いてその香が池面に漂いまた、蓮の沖あたり一面に菱(町の人はふしと言った)が繁茂し、水の中に白い花を付け、神苑の緑を背景に町の人々の目を楽ませてくれた。蓮の実や菱の実は十四年、十五年と戦争で食糧不足の子供達にとって大切なおやつにもなった。そのころ、まだ池で泳ぐ子供も居たが、かなり汚染が進み、池の底に足をつくると黒いあわが浮かぶような状態となった。池の汚染が特にひどくなったのは戦後の昭和三十年に入ってからで、池周囲の家から悪排水や工場などから油まじりの廃棄物の投棄等により全く汚染され、釣った鮎なども油臭くて食べられなくなり、果ては池の臭気臭つき、衛生上も池をそのまま放置して

おくことが出来なくなった。大正期から昭和の初め、本当に綺麗な池で観光地にしようなどという話もあった池、大正期、若者がみこしを担ぎ出す前に体を清めるみそぎの場となった池、水道設備や消火栓のなかったころ、防火用水の役や集中豪雨の際のダムを果たしてくれ池、子供たちの良い遊び場だった池、数えればきりがない程多くの恩恵を大野町民に与えてくれた諏訪池であった。しかし、こうした事情により遂に昭和三十八年四月、借しまれつつ埋立てられて明治元年にできて九十四年目に諏訪池は幻の池となった。

池の埋め立てで、新町や諏訪町の人たちにそのツゲが思いがけぬ形で覆いかぶさってきた。それは、両町内を縦断する旧国道八号線(役場前を中心に)路上に、集中豪雨のたびに三センチ余の水がたまり、付近の商店や住宅の床下や床上にまで浸水するようになり、それから十数年間この地域の人々は水害に苦しめられることになった。池のあった時にはとても考えられなかったこの事態に、池のそれまで果たしてきたダムとしての大きな役割とその恩恵を改めて思い知らされたのである。雨が降り続けると、心配で一晩中寝ずに起きていて畳をはぐったり、浸水する水の防御に夜を明かす家も多かった。大野連合自治会ではこの対策に村の援助を受け小沼に排水ポンプを取付け、湛水を中ノ口川に放水したがそんなポンプ一台では瞬時に増水する降雨の量には螻蛄の斧にも等しく、浸水に困った人たちがゴム合羽に長靴姿で役場へ陳情に押しかけるといふ光景が何回も見られた。浸水騒ぎがなくなったのは、川原に排水ポンプ場ができ、大野町裏の排水路工事が完工してからである。(それ以後現実には水害はなかった)と、八月三十日にこの原稿を閉じた。ところが九月一日午後七時半ごろから突如大野地区を襲った集中豪雨により、川原の排水ポンプと町裏の排水路工事の完成後、水禍から解放されたと安心していただけの地域の人たちを、またもや浸水騒ぎで驚かせた。この度の降雨量、僅か四十五分間に四十二ミリという驚くべきものだったという。せつかく川原に強力なハイテクポンプを備えながら、僅か離れた善久あたりは小雨というアンバランスな降雨量にハイテクポンプも肩すかしを食ったようである。超局地的な雨とはいえず、諏訪池の埋め立ては尾を引いているようだ。